

家庭科の男女共修をすすめる会

ニ
ュ
ー
ス
6

※発行日 '50 5 23

一部 50 円

※連絡先

東京都渋谷区代々木 2-21-11

婦選会館内

TEL 03-370-0238

第七回『家庭科の男女共修をすすめる会』集会報告

テーマ

「共修の家庭科で何を教えるのか」

日時 四月十九日(土)PM1:30~4:30

於 婦選会館

報告者

1. 加藤とみえ氏(元学芸大付属世

田ヶ谷中学校教諭)

2. 半田たつ子氏(家政教育社)

「男女共修の教育内容をどうするか」は、

「共修をすすめる会」発足当時から考えてい

たことである。今日は具体的内容を出してい

ただき検討してゆこうということになった。

加藤氏の実践報告

学芸大付属世田ヶ谷中学校では、三年前上

次回会合のお知らせ

第八回討論集会

テーマ 「憲法と家庭科教育」

講師 東京学芸大教授
星野安三郎氏

参加費 200 円

日時 6月21日(土)
Pm1:30~Pm4:30

場所 婦選会館
渋谷区代々木2-21-11
TEL 03-370-0238

もくじ

◎第七回「家庭科の男女共修をすすめる会」集会報告

△テーマ「共修の家庭科で何を教えるか」学芸大付属世田ヶ谷中学と京都府

立城高校の教育内容についての報告(1)

◎発起人 永井文相に面会(5)

◎共修の家庭科で何を教えるべきかアンケート調査報告(6)

◎教科審委員を訪ねて(8)

◎高校生の家庭科教育批判(8)

◎民間研究団体の動き(9)

◎市川房枝氏国会で文相に質問(10)

◎アンケートより(11)

◎マスコミの動き(11)

◎御協力ありがとうございました(12)

◎日誌メモ(12)

り技術・家庭科を男女共修と男女別学と二本建てで行っている。二時間続きで隔週やっているの、一年間に七回位しか出来ない。指導内容についての学年、担当者・分野・内容はニュースNo5でみていたが、男子の教師は住居関係・電気・園芸を女子の教師は、食物、被服、家族などを受け持っている。指導内容についての説明

一、男女共修の指導内容

住居関係では一年は自分の部屋を季節によりどんな工夫をして変えているのか。また間取りなどについて考えさせる。自分の家の製図をさせてみる。どこをどうあらわすか住宅設計製図の表示の方則などを知らせ、守らせながら書かせる。男子向けの機械の製図と建築の製図とは違うので生活と密着した具体的な勉強になる。照明については、電気器具のことや、電気料金その他の知識を知らせる。二年ではテストの便利などをこまかい指導をし、プザー作りなどを実習させ、実際に部分品に手をふれて、ハンダ、接着剤、ねじなどを用いて、電気の部分品にたしませ、電気器具に対する取扱ひなどを修得させる。三年の住居では住宅事情などを調べさせ、また理想的なすまいを設計させてみる。住居の周囲

の庭の緑化美化に目を向けさせ、草花などの鉢作りで発展させて、物を育ててゆく努力、工夫をさせる。

食物関係では、身近でんぶんをとりあげ、濃度、流動性などのでんぶんの性質を応用して、ブラマンシェを作る。小麦粉の性質としてグルテンの粘性を粉をこねくりまわす結果粉になれ、粉の種類、薄力粉、強力粉を理解することが出来る。鶏卵についても、その鮮度、卵白、卵黄の凝固温度の違いを実験させて正確に把握させる。卵の起泡性を利用して、小麦粉と鶏卵を使用して、ホットケーキを作り、小麦粉、鶏卵の性質を利用して何を作ろうか、という発想を発展させてゆくように、指導してゆく。

被服関係では学年は二年になり、やや男子に抵抗があるが、繊維の発達（天然繊維から化学繊維）について調べさせる。男子は将来繊維関係の職業につく人もあるわけで、繊維↓糸↓織物というルートで教える。接着剤などの発達からふ織布の話などする。繊維の性質は実生活と結びつけるために、しみ抜きなどを実験的にさせる。染色をやらせて、繊維の性質を知らせ、また創作的な能力を表現させることも出来る。衣料事情では実態をつか

ませ、現在日本人は一般に衣料を持ちすぎているので、被服に対する欲望をコントロールすることなどもとりあげる。ここで消費生活のことをやるが場合によっては衣食住をまとめて、三年にやってよいと思う。

家族関係

三年になって、我が家のなりたち、その他問題点についてグループで協力しあって、考えてゆかせる。乳幼児の発達では、こどもが出生する以前のこと。男女のカップルで、結婚のこと、性教育のことなど加味して考えさせてゆく。ここでは、現在の教科書に書いてある生後何ヶ月には歯が生える式の乳幼児の心身発達の取扱ひをせず、自分が幼児の時その後どんな時にほめられたか、またしかられたか、また食物の好き嫌いはあったかなかったか、そしてその時どうしたか。どんな遊びをしたか。遊びの工夫など、自分の経験を土台にして、グループ研究をやらせる。

二、女子だけの指導内容

一年食物関係、二年被服関係、三年総合という内容である。この技術家庭科でも手を使い、足を動かして、理論知識を実践してゆくこと。即ち実験実習し、それをまとめ、次にそれを基礎として、生徒自ら、発展させてゆ

く。例えば調理実習で、鍋のふたをするかどうかの可否、青菜をゆでること。調味することなど実験実習しながらプリントに記入し、その時間の終りに提出させている。なかにはガスの点火の方法も正確に出来ないのがある。被服関係では布の合せ方、縫い方など一枚の被服のどこに應用しているか考えさせる。ブラウスの製作では教師が大変苦労したが、被服構成も入れ、一時間実習したら提出する方法をとり、自分の力で最後まで仕上げさせる。まとめの勸賞もきちんとやる。

以上実践報告のあと質疑と討論に入った。会場から

- ・此の共修をもって発展させていくかどうか、また父母の考え方はどうか、反響は、
- ・中学校の技術家庭は内容が技術中心のため、共修にした時にやりにくいのではないのか。

これに対して加藤先生から共修は現在も、次に着任された教師がやっているし、将来、もって発展させてゆきたい。年令によって、その発達段階に応じて、生活のことについて何を考えさせたらよいか。生活は各家庭により違いが学校でやることは千遍一律であるが性差別せず考えあうことが大切である。また

今の学生は生活経験がとくに少く、自分の生活の中で簡単なこと（ふとんのあげおろしなど）も出来ない。学校の勉強以前に生活の指導をすべきではないか。父母は共修を喜んで、いし、学校に対してとやかくいっていない。他教科の教師達も協力的である。加藤先生自身も父母に「こどもを王様にしないでくれ」、「勉強勉強といわないで日常生活のことを自分でやり、手伝いをさせてくれ」といわれている。

中学校は技術中心、高校は社会的の内容であるが、教科がきまった時、科学技術の振興を性急に中学生までやらせようとしたところに問題があり、技術科の体系を作ったところでは、一貫性をもった内容にしたらよかったのではないか。現在、教科内容を学校毎に、考えて組み立て直した方がよい。

続いて半田たつ子氏より京都府立山城高校の実践報告がされた。昨年六月、山城高校の森先生が実践報告され、共修が制度化されるまでの十年間のためめ研究活動、カリキュラムの構造などおもに話されたが（詳しくはニュースNo2）今回は昭和四十九年度の指導計画表をしめされ（ニュースNo5参照）指導内容について実施された時間配当、指導内容

について実施された時間配当、指導内容に対する生徒の反応のしめし方、その授業効果と教師の反省と工夫、男女共修に対する生徒の意識調査その他が報告された、要旨を箇条書にしてみると、

1 男女共修に対する生徒への調査結果

- ・共修の意義を理解し、効果があがった
男子二十九人 女子六〇人
- ・共修の意義を理解せず、効果があがらぬ
男子二〇人 女子四人
- ・前にどちらともいえず中間的存在
男子一七人 女子一三六人
- ・男子も家庭科を学ぶべきだ
女子九九人 男子一〇人

（男子がするなんて考えている男）

- 2 指導内容について生徒の反応のしめし方
- ・調理実習は大変おもしろかった。一回しか出来なかったのが残念
- ・物価、公害、家庭経済、社会保障などのグループ学習は大変有益であった。
- ・話しあい、討論をもっとやりたい。問題が広範囲に渡るため、中途半端になるがもっと深く掘り下げて研究したい。
- ・共修が二年生の時だけ一年間でつまらな。他の主要教科があり、家庭科は

充分出来ないうらみがある。

・指導内容について生徒の興味のしめし方を高い方からあげると調理、生活の現状、物価、保育、家族の歴史とその機能・保育は生徒が興味をもっているし、重点をおく必要がある。

3 授業効果と教師の反省など

・「家族の歴史」が余り興味をもたれなかった。これは歴史の流れの中でどう変化してきたか、変化してゆくかをとらえるので彼等の家庭環境がはた織が多く、家内工業で差別意識もなく、女の問題意識がないためで、地域性がある。「家族の形態と機能の変遷」は講義になりがちであるが、グループ学習でグループ討論をさせた方がよい。抽象的な講義は駄目である。

・「消費者問題」は最後になっているが、衣食住の各内容の中で取りあげたらいよい。「消費者問題」や「社会保障」は授業として成功であった。

・一学期に五時間を生み出して男性観、女性観の討論をさせたことは有意義であった。

・男女共修をやって自分の生活をみつめ

るなかで人間観、能力観、学力観を育てることが出来る。また個人の劣等感、優越感、挫折感をなくしていくのに役立つのではないか、共修の家庭科を充実・拡充させてゆく将来の家庭生活への展望を作らせていくことが出来る。

3 時間配当（実施した時間）

1. 生活と家族	2
2. 生活と経済	2
3. 生活と衣食住	2
4. まとめ	2

1 生活の現状	2
2 家族の歴史とその機能の変遷	4
3 家庭生活と法律	3
4 家庭生活と職業	3
5 まとめ	2
6 保育	10
7 統生活と経済	7
8 食生活	4
9 調理実習	5
10 衣生活	2
11 住生活	3
12 3 住生活	3

入れることが必要である。質疑と意見交換に入り、「山城高校の生徒の家庭環境が余りよくないとはどういうことか」に対し、京都は小学区制で生徒は玉石混雑で家内工業が多く進学率もそれ程高くない。教師の意識が高く男女の差別は学校では感じられないし、共修については長い期間研究を重ねてきて、今日の実施になった。

今回の報告の結果として、教師は生活指導を背景において授業することが大切である。現代の社会状況、生活の現状から生徒ひとりひとりが、かかえている矛盾に答えるような授業をしていくように。そしてとりあげる指導内容の配列・指導方法に一段と工夫を重ねてゆくことが大切である。（青木）

◎アンケートから

以前、定時制高校に勤めており、女生徒だけを対象に教えておりましたが、家族関係等の授業内容を扱いました。この問題を含めて女子だけでなく男子生徒にも考えてもらいたい事がたくさんでございましたし、生活科学として男女共修をすすめて行くべきだと考えます。また女子にも技術系の学習が必要で、コンセントひとつ修理できない女性が多くなっていますから。（近藤由美子）

五三六名の署名と共に永井文相に面会

冷たい霧雨が降る三月一日、市川房枝他九名の発起人は国会の予算委員会で忙がしい永井道雄文相と十五分という短いながら初めての面会をした。「中・高校の女子のみの家庭科で男女の役割意識が生じ、はては生活意識の違いもここに起因するという市川の言葉にひき続き、この運動の趣旨を口々に語った。中学の技術・家庭は男女別コース、高校は女子のみの家庭一般必修、これを男女ともに学ぶようにしてもらいたい、それは男女を問わず人間らしい生活を創り出していく能力を高校までの普通教育の中で養わなければならぬと考えるからであると、まず訴えた。家庭科は戦後社会科と共と民主教育のホープとして誕生、家事裁縫の合科でない、技能教科でない、女子用教科でないという三否定の上に成立した。女子だけの家庭科は根拠薄弱、現物はやりにくい、生徒を納得させることができないなどと語り、日本国憲法、教育基本法、国連の婦人に対する差別撤廃宣言等で男女平等がうたわれているが、永井文相はどう考えておられるかを問うた。文相は次のよう

に語られた。

◇平等はあたり前◇

男女平等はあたり前のこととして私は憲法教育基本法以前から考えてきた。

◇家庭も社会も男女でつくる◇

家庭は決して女子だけで作るものではない。家庭は女、社会は男という固定観念があるが共に男女いっしょにつくるものである。戦後男女平等というところから男の仕事に女がどんどん参加するようになったが反面、家庭の担い手がなくなった。そこに問題が生じたことをアメリカのM・ミードなども指摘している。市川さんのように社会的に活躍している女性を珍らしがり、家事に参加する男性を珍らしがるが、これは決して特異なケースではない。

◇家庭は社会の波止場◇

東京では四割の子どもが朝食ぬきで登校、全国平均では一割、というデータがある。さらに帰宅後は、塾・夕食・テレビまたは受験勉強と続く。親子はいっしょに接するのかわたしは新しい家庭の問題であり、男女ともに考えねばならぬことである。家庭は社会生活の拠点であり船にたとえれば波止場である。家庭エゴイズムは世界的に強くなっているがこの

現象は社会の衰退を招きやすい。

◇男はほんとうに社会的か◇

日本では男には社会性があり女には乏しいといわれているが男が社会的かどうか疑問である。家庭エゴの人が会社で月給をもらうためのみの仕事をしていて社会性があるだろうか？家庭を考えるときは常に社会を含めて考えなければならぬ。現状を肯定しそれを男がいっしょにというのでなく「家庭とは何か」「家庭をどうするか」から問いをおす必要がある。

◇カリキュラムにどう生かすか◇

カリキュラムに以上の考えを盛り込むには現在の家庭・体育という組合わせの他に家庭・職業、家庭・工作など考えられる。男女を問わず選択して学ぶことができるよう教課書の委員の方々に検討してもらっている。

発起人はさらに京都の例を説明し理想的な教育内容ができてから共修を実施するというのではなかなか改善できない。改善はいそがねばならないと訴えたが文相は「やうなついでおられた。そのあと五三六名という署名の重みを文相にもお見せしたあと、教課審に渡し、さらにいっそう運動をすゝめなければ」といふ思いを新たにした。（馬場）

男女共修の家庭科で何を教えるか

内 容	必 要 性 ()内は特に重要	どの段階で教える か○内は順位	
		中 学 校	高 等 学 校
家庭生活をめぐる諸問題の発生状況	39 (21)	15 ⑩	20 ①
健康と食生活	33 (18)	24 ①	16 ⑧
健康と住生活	32 (16)	23 ②	11
健康と衣生活	29 (11)	23 ②	12
性の生理的側面	28 (10)	19 ⑤	10
性の社会的・文化的側面	28 (8)	16 ⑧	16 ⑧
家庭保育と集団保育	26 (7)	9	17 ⑥
婦人問題	25 (14)	9	19 ②
家庭と法律	25 (8)	5	17 ⑥
家庭生活の変化と問題点	25 (7)	10	15 ⑫
住生活の現状	25 (6)	13	18 ③
税金・社会保障・社会福祉	24 (9)	9	18 ③
物価問題	24 (6)	12	16 ⑧
食生活の設計	24 (3)	14	9
消費者問題	23 (12)	16 ⑧	13
家族の歴史	23 (12)	12	11
保育問題と課題	23 (9)	2	18 ③
家事作業の分担	23 (8)	21 ④	7
老人問題と老人福祉	23 (7)	7	12
食生活の歴史	22 (4)	14	8
住生活の歴史	22 (4)	19 ⑤	9
人間関係の民主化	21 (9)	18 ⑦	8
食生活の課題	21 (7)	12	15 ⑫
収入、特に賃金の問題	20 (6)	14	14
消費財の生産・流通のしくみ	20 (4)	15 ⑩	8
衣生活の歴史	20 (4)	15 ⑩	12
住生活の課題	20 (2)	5	16 ⑧
衣生活の課題	18 (4)	10	12
衣生活の設計	17 (2)	11	8
住生活の設計	17 (1)	8	11
基礎調査	12 (6)	14	6
生活時間の管理	12 (3)	8	7
被服製作(基礎的なもの)	12 (0)	10	3
献立作製	7 (3)	8	5
応用調理	7 (3)	7	10
支出の問題	7 (2)	8	4
被服の管理	7 (1)	8	2
妊娠・出産	7 (1)	3	6
乳幼児の心身の発達	6 (1)	1	6
衣服のデザイン	6 (0)	5	3

アンケートの必要上、家庭科の教育内容案を下記のように作成したが、これはもちろん、本会として充分な検討を尽くした成案ではない。左頁の表は、必要と答えられた数の多いものから順に、小項目を配列したものである。「家庭生活をめぐる諸問題の発生状況」を、41名中39名が教える必要ありと答えている。

アンケートの数は少ないが、有意義な具体的な提言をいただけたことを、本会としても喜んでいる。お忙しい中をご協力下さった方々に感謝し、この結果を充分生かしたいと思ふ。

(半田)

住生活	衣生活
・住生活の歴史 ・住生活の現状 ・住生活の課題	・被服の管理 ・被服製作 ・衣生活の課題

「男女共修の家庭科で何を教えるか」

アンケート報告

本会では、家庭科を男女共修の教科とするこの教育的意義が次第に認識されるにつれ、共修の家庭科で何を教えるか、教育内容の検討をすすめる必要をいっそう痛感してきた。細かなことは専門家に任せるとしても、最低これだけのことを教えてほしいという内容を検討した上で、運動を広げなければならぬというものが、会発足当時から考えてあった。現在、教育現場ですでに実践されている教育内容や、研究者によって討議された実例を集めたパンフレットを、「家庭科の男女共修をめぐる一問一答」に続いて作成中であるが、前述のような考えから、四月十九日の集会では、「共修家庭科の教育内容」をテーマに掲げたのである。これに先立ち、三月には、この運動に深いご理解を示して下さる方々から「男女共修の家庭科で何を教えるか」についてご意見をうかがったので紹介したい。

対象は、男性賛同者、家庭科教育研究者、家庭科教師、「働く母の会」会員、学生、各20名ずつ計100名。うち41名の方から回答をいただいた。

さらに、回答者のグループ別みると、「働く母の会」会員が、「家庭保育と集団保育」「人間関係の民主化」「家事作業の分担」「婦人問題」などを、学生が「性」「婦人問題」「物価問題」「消費者問題」などを、教

項目	小項目
家庭生活全般	・家庭生活をめぐる諸問題の発生状況 ・家庭の歴史 ・家庭生活の変化と問題点
家族・性教育と保育	・性の社会的・文化的側面 ・性の生理的側面 ・妊娠・出産 ・乳幼児の心身の発達 ・家庭保育と集団保育 ・保育問題と課題
家族・家庭生活の管理	・家庭と法律 ・人間関係の民主化 ・家事作業の分担 ・生活時間の管理 ・老人問題 ・収入特に賃金の問題 ・支出の問題 ・税金・社会保障・社会福祉 ・消費財の生産流通のしくみ ・物価問題
食生活	・消費者問題 ・食生活の歴史 ・健康と食生活 ・食生活の設計 ・献立作成 ・基礎調理 ・応用調理 ・食生活の課題
衣生活	・衣生活の歴史 ・健康と食生活 ・衣生活の設計 ・衣服のデザイン

教課審委員

吉本二郎氏を訪ねて

三月八日の十一時頃から約一時間半、発起人五名は、教育課程審議会委員吉本二郎氏（教育大教授）を筑波大入学試験の行われていた教育大に訪ねた。

資料をよく御覧になっており、家庭科の男女共修に関して次のように述べられた。

・新しい家庭科の構想で今の家庭科の先生はそれを教えることができるか疑問である。・何をやるから共修を、という必要性を持たなければ説得力がない。

・つめ込み教育に対し、いかに時間を少くしていくかが問題となっている今、共修により一時間増える事は母親達を納得させる事ができるか。時間教全体をどうおさえるか。

と語った。話の中の「今の若い奥さんと軍隊生活を経験した私が家事をやったらどちらがうまいだろうか」「習わなくてもできる事」という発言からも、家庭科・料理・裁縫という発想が感じられた。又、他の教科審委員の言にも共通する「実践の前にまず理論」といふ考え方に、共修の内容検討がさらに急がれる思いであった。

(B・Y)

投稿xxxxx

高校生の家庭科教育批判

森本千秋

先日、ニュースNo.5を読ませていただき、みなさん、すごくがんばっていらっしやるんだな、と感心いたしました。そこで、家庭科を受けさせられている、一人の高校生としての意見を少々書いてみる気になりました。

考えてみれば、わたし達高一の女子が、初めて家庭科を受けてから、五年もたっています。最初の二年間は小学校で男女いっしょに受けました。中学に入ってから男女別々になりました。そして高校入ると、なんと女子だけが家庭科で、男子は体育です。家庭科のこともときどきなわたしにとって、これは苦痛です。小学校の時は料理や裁縫が多くて、楽しかったのですが、中学に入って、家庭生活はこうあるべきだ、などというものがでてきたから、大嫌いなになりました。もし今、家庭科か体育かという選択がありましたら、わたしは体育を選ぶでしょう。

友達に聞いてみても、ほとんどの人が今の家庭科の状態に不満を持っています。まず、

なぜ女子だけが受けなくてはいけないのか、という疑問を持っています。わたし達は和

なでして、家庭に閉じこもっている気はまったくありません。それに男子がやっていけない理由はどこにもありません。そして、もう一つは内容のことです。現在、わたし達が使っている教科書は、たしか五つのセクションに別れていたと思います。衣生活、食生活、住居、家庭経済、そして保育です。どのセクションもみな、抽象的で、なにをいいたいのかわかりません。特に保育のことなど、何歳では物が握れるとか、何歳でブランコに乗れるなどというのを中学の時、覚えさせられた記憶があります。高校でもそんなことをやるのかと思うと、ウンザリします。また、家庭経済、食生活、衣生活のところでは、現在の状況などほとんどなく、理想ばかり書いてあります。正直いって、調理実習の時以外、家庭科の時間にあくびのない日はありません。わたし達はみんな、いろいろな面での家庭科の改善を待ちのぞんでいます。

文句はこれぐらいにして、アメリカの家庭科について、お話ししましょう。アメリカといっても、その州によって、その地区によって教育制度が違うので、わたしは自分の通って

いた地区のことしか知りません。わたしの通

っていた地区では、7年生(中一)では、日本の中学と同じように男女別で必修でした。しかし、8年生(中二)以上は、日本では女子だけしかやらない家庭科も、男子だけしかやらない技術も選択でした。つまり、男子が家庭科を選択して、料理や裁縫を習っても良かったし、女子が技術を選択して、電気製品をいじくりまわしても良かったわけです。そして、技術を選択した女子はたいへん多かったです。家庭科を選択した男子も何人かいました。わたしにはぜんぜん不自然に見えませんでしたし、かえって、たいへんすばらしいことだと思いました。家庭技術は男女必修で、選択科目にしたらいのになと思います。

結局、家庭科を男女共修にし、よりよくするためには、女は家庭でしとやかに、男性は外でなどという古い観念を捨てるのが第一だと思えます。そして、家庭科の内容を改め、家庭科は料理、裁縫を習うところというイメージをなくすることです。家庭科は自分に身近な社会を考えるのに、たいへん良い教科なのです。ですから、そのような内容にし、楽しく学べるようにしていただきたいし、したいと思

民間教育研究団体の動き

春休みを中心にして家庭科に関する民間教育研究団体の各種研究会が持たれましたが、そのうち参加することができたいくつかの集会で討議されたことがらを、紹介したいと思います。

一、家教連大島合宿研究会

三月三〇、三一の二日間大島の朝海旅館でもたれた合宿研究会には小・中・高から約四十名の会員が参加して、家庭科の系統性をさぐることをテーマにもちよった実践例を検討、整理して「内容案例試案」の構想を編成しました。

この実例は小・中・高一貫した共修家庭科の内容をのぞいたものですが、編成の視点として、①科学的知識の体系、②子どもの認識の順次性にそうとと、③技能、技術の系統や④地域の生活課題、⑤領域相互の関係をおさえること、従来確認されてきた人なをV/AのようにV/AなせV/A現状はどうなっているかV/AこれからどうしたらよいかVの視点によって編成を試みました。

右の成果は、四月一日、二日にかけて整理、ひきつづいて持たれた左記の会に提案、討議されました。

二、大学家庭科教育研究会

四月三日後一時より四日後四時まで二日間の合宿研究会には大学の現場教師を中心に約三五名の参加がありました。テーマは家庭科成立の理論的根拠についてで、初日は戦後の家庭科論、家庭科構想を総ざらいしたあと家庭生活の機能と「労働力再生産」の概念規定をめぐって討論がおこなわれ、二日目は「家庭科不要論」の背景を説明するところから「あらたな家庭科論」が提起されました。しかし、家庭生活に関する文化、科学が未発達な現時点で教科として特設するに足る理論をどう打ち立てるべきかについての結論を出すまでには至りませんでした。

家教連の「内容案例」についての討議では「家庭科の独自性」は「生活資料の消費過程における生命の生産・再生産過程の科学」と限定すべきであることが指摘されましたが、家族が高校で重点的にとり上げられ、小・中でのウェイトが弱いことに対して疑問が出されました。

三、民教連討論会

四月二十九日には、民教連諸団体による
高校における一般教育と職業教育の内容を
追求するをテーマに、現場中、高教師と父
母約一〇〇名が参加して討論集会がもたれま
した。

そこでは、多様化のなかで知的荒廃を深め
つつある東京の高校生の実態が、普通高校、
農・工・商業高校から提起され、その回復の
ための現場のとりくみが実践的に報告されま
したが、選別された高校生たちの共通性は生
活全般に対する無力感、挫折感で均一化する
こと、対応して知的能力のゆがみ、身体的能
力のひくさ、人格的諸要素等が深く結びつい
て存在していることが報告されました。

こうした状況のもとで「実習」をテコにし
た学校ぐるみの都立農産高校のとりくみは、
家庭科の教育方法を追求する上からも大きな
教訓をあたえました。家庭科の実習における
子どもたちのいきいきとした姿は、家庭科の教
育内容や方法を考えていく上からいっても再
評価する必要があるようです。

(文責、和田)

市川房枝氏 文相に質問

一参院、予算委
(三月二十五日)

三月二十五日の参院の予算委員会中市川房
枝氏が婦人問題でいろいろ質問したがその中
での永井文相との質疑を要約して報告する。

最初に市川氏が「婦人に関する諸問題の総
合調査報告」の結論の一つとして、現在の
日本婦人は、妻として母としての役割意識過
剩にして、一人の婦人の意識はの中に埋没
しているといった文句があるが、そういう事
実を認めるか、認めるとしたらその原因はど
こにあるのかと質問したのに対し、永井文部
大臣は「婦人が家庭に結びつけられて、社会
的な問題とか政治的な問題に対してかなり関
心が薄いということが指摘されている。私も
事実そういうことがあると思う。なぜそうな
ったかというところは、戦争直後は女性の社会
的活動というものが非常に盛んになり、こ
十年ぐらいは高度経済成長の中で、マイホー
ム主義で消費生活というものが非常に重んじ
られる傾向が強くなった。これは男性の方に
もマイホーム主義が相当ある。別に婦人だけ
の問題ではないと思うが、そういう勢いの中

で婦人の社会的関心が薄くなってきたのが一
番重要な理由ではなからうかと思うと答えた。

市川氏はさらに、その理由の一つとして、中
学、高等学校においてははっきりと女子のみに
家庭科を必修にして、男子はその時間、技術
とか体育とかに差別していることが、女の子
には、じゃあ女は家庭だけ、男は家庭なんか
関係ないという考え方を与えてしまっている。
それが大きな原因ではないのか、こう思うの
で、実は私も、家庭科の男女共修をすすめ
る会というのをつくっている。私はやはりこ
れは単にいまの問題だけでなく、将来の日本
を築くために、一諸に教育することが非常に
必要だと思いがその点どう考えられるかと切
込むと、文部大臣は「男女の共修をすすめる
会が盛んに活動なさっていることは存してい
るがこの問題は相当いろいろな面があると思
う。現在、教育課程審議会がこの問題を検討
している。いろいろな方法や主張がある。
たとえば家庭科というのを男女ともに共修、
必修にしてはどうかという意見もあるし、あ
るいはもう少し選択的に相互に入り込むよう
にしてはどうかという意見もある。私はこの
問題を相当中広く考えねばならないと思っ
ているのは、家庭科の学習で何をやるかとい

問題があるからである。男女がなければ家庭
は形成されないわけだから当然、男性も家庭
について責任を持っている。それはいづゆる
家庭科で教えるだけでなく、社会科などで
も教えている。また人間関係などでも教える
か考えたい。いま教育課程審議会が審議を
お願いしているが結論を急ぐべきでなく、先
生方の御意見を尊重したいと思っている。

やはり一つの問題としては、男女にある種
の役割り分化というものはある。そして他方、
平等というものが協力というものがある。
それを生かしていくにはどうしたらいいか、
必修必修というのも一つの考え方が、私は
この問題については選択というふうな角度も
含めて、審議会に討論していただき、また社
会の御意見も承って、今後の日本の家庭をつ
くっていくのに最も望ましいような方向の結
論が出ることを期待している。」と答えられ
た。

アンケートより
(文責、嶋田)

若い女性の結婚へのあこがれとか、幻想！
マスコミでもあまりにも美化されていますの
で、打ちくたさうな家庭科教育を痛感しま
す。とくに、出産、育児で一時的にでも職場、

を離れるというところが現在の社会でどうい
う意味を持つかわ、徹底的に教えるべきだと思
います。この点は、この問題を共かせぎの
女と、主婦職業の女をつなぐ環にもなると思
います。主婦職業にならざるを得なかった子
どもち女の悩みは、本心に深刻です。こういう人
達とも連帯して現在の就職差別へ反撃して
いくような運動が必要だと思います。

(美土路瑞江)

私の家族が、祖母、母、それに私と娘の4
人、まったく女家族の中で娘がこれから先
生きていく道は決して楽ではなく、むしろ厳
しいだろうと思う。その娘のために、もし
て自分自身のためにも少なくとも教育の場
における男女の差別は撤廃していきたい。少
しも私たちが変り、教師がかわれば、社会も
もっと変わるのでは、そのテコにしたいと思
います。

(豊原淑子)

家庭生活のあり方は外側から規定されるも
のではなく、内側にいる者が自由に創造する
ものである。そこで、家庭科を女子にだけ教
え、男子に教えないというのは、家庭生活の
あり方を一定の形で外側から規定することに

なると思う。

(中山和子)

家庭科教育をわずかに男女で小学校で行っ
ているけれども、家庭環境、生活態様の観念
は、中・高における女子のみのかたよりの大
きな原因があると思う。人間破壊、環境破壊
の大きな波にのみこまれないように、家庭科
の男女共修は絶対実現させなければならぬ。

マスコミの報道をまづ

(野村一枝)

一家庭科の男女共修をめぐって

「ニュース1」によると、四八年二月五
日にNHKの「こんにちは奥さん」で「女子
必修の家庭科」が取上げられ、出席した奥さ
ん達のほとんどが、女子必修に反対した。

「会」が発足した四九年一月二六日から、現
在まで、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌等で共
修運動が紹介されたり、賛否両論が交わされ
てきた。

今年には国際婦人年のせいもあるが、二月
五日に「奥さんこんにちは」を皮切りに、
テレビでよく扱われるようになった。三月二
一日夜十一時、TBS「教育の中の男女差別」
では、会のメンバーが文部大臣を訪問したと
ころから始まり、戸山高校で、女子が家庭科、

ご協力ありがとうございました

- ◇文部省に提出した署名は5636名分答申がでる前に更に追加分を提出したいと思います。時期をみて東京都にも署名を提出します。
- ◇パンフレット「家庭科の男女共修をめぐる一問一答」は4000部出ました。今第二のパンフレット「男女共修の家庭科実践資料集」(150円送料別)を作成中。7月末頃までに出来上ります。
- ◇今年度のカンパはおかげさまで10万円を超えるに至りました。

发起人一同

これからもよろしくお願いたします

振替口座番号
東京一九一八九一
家庭科の男女共修
をすゝめる会

男子が体育をやっている現実が紹介されたり、また京都の共修の授業風景が紹介された。別学や共修の教師や生徒へのインタビューも入り、家庭科の男女別学が、男は外でかせぎ、女は家を守るという意識をそだてているのではないかと結ばれた。

四月四日の「奈良和モーニングショウ」の「全女性に訴える、男に炊事、洗濯を」には、会から、市川、樋口が出席し、共修反対者の、安田武氏、飯才氏、上坂冬子氏らと激論を交わした。この番組には男性が家事、育児のすべてを引受けているカップルが登場して、その仕事ぶりを紹介したり、坂本九にも「二人の子供ですもの、両方でみるのはあたり前」などと言わせ、なかなかバラエティに富んだ内容になっていた。しかし、反対者の側が、家庭科とは「家事、裁縫」のことだという考えが強くあり、共修とは「一人が味噌汁の味を刻んでいたら、もう一人が味噌を入れるんですか」という感情的にして、かつうわつらな意見が男性から出され、もっともっと論議されなくてはと思われた。お昼のワイドショウでも、賛同者になってくれた中山千夏氏や桐島洋子氏が、自分のことは自分で出来る人間にという話のついでに、共修運動も紹介してくれた。大阪の朝日新聞では「声」欄で共修をめぐる賛否が交わされ、信濃毎日では、十二回にわたって「家庭科「男もやるべし」が掲載された。

(中嶋)

日誌メモ

- ☆3・8 教科審委員 吉本二郎教育大学教授を訪問(半田・馬場・落合)
- ☆3・15 永井文部大臣に家庭科共修を要望(市川・半田・嶋田・青木・中嶋・落合・梶谷・馬場・佐藤・塚本)署名(五六三六名)程出
- ☆3・21 和田先生宅で発起人会
- ☆4・4 奈良和モーニングショー 全女性に訴える 男に炊事・洗濯に出演 市川・樋口
- ☆4・8 発起人会
- ☆4・9 サンケイ新聞社会部赤松氏取材に来訪(梶谷・塚本)
- ☆4・10 「家庭科で生活の大切さ学ぶ」梶谷さんの投書大阪毎日に掲載
- ☆4・19 討論集会「共修の家庭科で何を教えるか」講師 加藤とみえ先生
- ☆信濃毎日新聞3月5日より一六回にわたり家庭科の問題連載
- ☆ザ・ファミリー(団地向新聞)家庭科の男女共修は是非か。3月7日